

## カナン人の滅亡

「彼らは町にあるものは、男も女も、若い者も年寄りも、また牛、羊、ろばも、すべて剣の刃で聖絶した。」(ヨシュア記 6:21)

(1) イスラエル民族が約束の地に入る前に、その地の人々への対応について神は厳しいことを指示された。それは極端に見えるけれども、その地の人々を完全に滅ぼすようにという命令だった。「しかし、あなたの神、主が相続地として与えようとしておられる次の国々の民の町では、息のある者をひとりも生かしておいてはならない。すなわち、ヘテ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人は、あなたの神、主が命じたとおり、必ず聖絶しなければならない。」(申20:16-17, ⇒民33:51-53)

(2) イスラエル人がヨルダン川を渡ってカナンの地に入った後に、主はこの命令を繰返された。ヨシュア記の著者は町々とそこに住む人々を聖絶するのはイスラエルに対する主の命令だったと数回にわたって書いている(ヨシ6:2, 8:1-2, 10:8)。新しい契約のもとで生活しているキリスト者は大量虐殺というこの命令が、聖書全体に示されている神の愛や義、公平や神が悪を憎まれることとどのように調和するのかとしばしば不思議に思ってきた。

(3) エリコの滅亡は極限までに神に挑む非常に邪悪な人々に対して、神が正義のさばきを下されることを証明している(創15:16, 申9:4-5)。言い換えればその町の住民とカナンの地のそのほかの住民が道徳的に完全に墮落してしまったので聖絶されたのである。その邪悪で破壊的な影響がさらに広がる前にそれを除去しなければならなかった。考古学によればカナン人が偶像礼拝、宗教的売春、暴力、子どもをいけにえにすること、交霊術(死者との交流)など、考えられないほどの邪悪な慣習に全部かかわっていたことが明らかになっている(⇒申12:31, 18:9-13, →ヨシ23:12注)。

(4) カナンの地の悪と偶像礼拝(にせの神々やまことの神に代るものを拝むこと)という強い影響力からイスラエルを守るためにはカナン人の聖絶が必要だった。もし神を敬わない民族を残しておくなら、イスラエル人は不道徳な礼拝の慣習を受入れ、にせの神々に従い、カナン人が日頃行っているほかの様々な罪を行うように感化されることを神は知っておられた。申命記 20章18節には、神の民は神を敬わない慣習から分離し、世的な社会の邪悪な影響を退けなければならないという不変の聖書的原則が示されている(申7:2-4, 12:1-4, →「信者の霊的聖別」の項 p.2172, 「キリスト者とこの世」の項 p.2437)。

(5) カナン人の町と住民に対する聖絶は、人々の罪が極限に達するとき、神のあわれみはさばきに変るといふ、さばきの基本原理が具体的に示されている(⇒ヨシ11:20)。洪水のとき(創6:5, 11-12)や邪悪なソドムとゴモラの町が滅亡したとき(創18:20-33, 19:24-25)、人類の罪は同じように極限状態に達していたのでさばかれたのである。

(6) イスラエルの歴史は反逆の歴史であるけれども、それは同時にこのさばきの原理とともに、異邦の民をみな滅ぼすようにという神の命令がどんなに重要だったかを示している。イスラエルは神の命令に背いてカナンの地に住んでいる人々を完全に追放しなかった。その結果、その間違った信仰と生活様式を受入れ、にせの神々に仕えることになった(→士1:28注, 2:2注, 2:17注)。後に士師記はこの背教(唯一のまことの神を信じる信仰を拒む霊的反抗)に対して神が何をされたかを記録している(→「背教」の項 p.2350)。

(7) この時代のカナン人の聖絶は、正しくない人々(自分勝手な道を歩み続けて神の赦しを受入れず、神の導きに身をまかせない人々)に対する神の最終的さばきを示す預言的象徴である。神の第二の、本当の「ヨシュア」であるイエス・キリスト(ヨシュアという名前は旧約聖書のヘブル語で、新約聖書のギリシヤ語のイエスと同じ)は、神を恐れない人々と戦い、さばくために天の軍勢を引連れて再び来られる(黙19:11-21)。神の恵み深い救いの提供を拒んで、罪の中にとどまる人々はみなカナン人と同じように滅びる。そのとき神はこの世界の勢力をみなくつがえし、地上に義の王国を確立されるのである(黙18:20-21, 20:4-10, 21:1-4)。